

第 20 回女子美パリ賞報告書

角谷 沙奈美

目次

○プロフィール（略歴・展覧会歴・受賞歴）

○国際芸術都市滞在の動機・目的

○制作 研究活動

・制作発表

・Cite Internationale des Arts

・フランス語

・研究活動

○結び

角谷 沙奈美

- 1982 青森県生まれ 神奈川県で育つ
2005 女子美術大学芸術学部絵画科洋画専攻 卒業
2007 女子美術大学大学院美術研究科美術専攻洋画 修了

個展

- 2011 「角谷沙奈美展」 G G J 東京銀座
2012 「どこへでもゆける」 潺画廊 東京世田谷
2012 「ふりむけば、」 Gallery Forgotten Dreams 東京清澄白河
2013 「花とゆめ」 Gallery Forgotten Dreams 東京清澄白河
2013 「私の日常、誰かの日々」 潺画廊 東京世田谷
2016 「ドラマチックな日々」 Gallery Forgotten Dreams 東京清澄白河

グループ展

- 2013 第8回ヤドカリトーキョー展覧会「交流点+」 日本橋小楼ビル2階202
2013 「忘れられた夢 第1ステージ」 Gallery Forgotten Dreams 東京清澄白河
2015 「若手卒業生による絵画展」 JoshibiArtGallery.Shanghai 中国上海交通大学
2016 「-百花撩乱- 百人のバラ展」 銀座三越7階ギャラリー 東京銀座
2018 「角谷沙奈美 宮本絵梨 野間祥子」 あらかわ画廊 東京銀座
2018 「SICF18 Winners Exhibition」 スパイラルガーデン 東京青山
2019 「角谷沙奈美 田制可奈子 野間祥子」 あらかわ画廊 東京銀座
2019 MINA-TO Art Wall [角谷沙奈美] MINA-TO(Spiral 1F) 東京
2019 "Invisible Infinity- Exposition collective de 8 artistes japonaises Exposition-"
GALERIE YOSHII, パリフランス
2019 " Future Mythology Diaries" Joshibi University Art & Design x Cité internationale des arts,
Galerie - Cité Internationale des Arts, パリ フランス

レジデンス

- 2015 BankART Artist in Residence 主催:BankART1929 共催:横浜市観光局
2019 Cite internationale des arts フランス

公募

2010 シェル美術賞 入選

2017 SICF18 A 日程 ブース No.31 主催：株式会社ワコールアートセンター

受賞その他

2014 第14回「女子美制作・研究奨励賞」受賞

2017 SICF18 張熹賞 受賞

2018 第20回女子美パリ賞 受賞

【国際芸術都市滞在の動機・目的】

滞在目的はフランス近代絵画を中心とした西洋美術史の研究を通して歴史や文化、環境がもたらす表現への影響を探り、シテデザールにおける制作活動を通して制作テーマと展示のあり方について再考する事である。私の制作テーマは日々の暮らしに潜む普遍性を探る事である。日常性を重要な要素と捉え、非日常である異国での生活から日常とは何かを考え、生活・制作・展示を一括りとし、一つの作品として提示できるかを試みる。

本文

初めてパリを訪れた時のことである。目紛しく美術館を見て周る中で、学んできた西洋美術史の点が繋がって線となって行く様に興奮しながらも、圧倒的な文化や歴史の違いを前に日本人である私に、はたしてその美術史の線は延びているのだろうかという疑問は大きくなっていった。肩を落とし疎外感と共に美術館を出ると、西日が新緑を照らし複雑な影を道に落としていた。その光景はとても美しく、まるで今見てきた絵画の世界が続いているようであった。画家が描きたかったものはこのような心の震えだったのではないか。そこに共通の感覚を覚え、疎外感が和らいでいったのを憶えている。

この時パリで感じた共通点と相違点。この二つの間にある歴史や文化、環境がもたらす表現への影響について美術史の研究を通して探り、自身の制作テーマと展示のあり方について再考する事が私の滞在目的である。

私の近年の制作テーマは日常生活に潜む普遍性である。個々の小さな世界の連続が外の大きな世界を作っているのであれば、日々の暮らしのなかで埋もれてしまう何気ない出来事のなかに世界の根源が潜んでいるのではないかと考え、身近な風景や出来事をモチーフに選んでいる。日常性を重要な要素と捉えているが、生活から切り離された無機質な空間にそのまま飾りだけの展示に、テーマとのズレを感じはじめた。その点で、生活と制作そして発表の場が同じ環境にあるシテデザールという施設はそのズレへの答えを求める実験の場として理想的ではないかという考えに至った。暮らしの中での閃きから絵画作品が出来るまでの過程を可視化し、絵画だけではなく、絵画が内包している様々な生活のピースを交えながら空間作りに取り組む。そして定期的にオープスタジオを行い、インスタレーションへの展開を追求する。

異国での暮らしは非日常である。一年の滞在を通して日常に変わっていく過程を体験する事も滞在目的の一つである。

【制作・研究活動概要】

派遣期間：2019年4月3日～2020年3月18日

- 4月 フランス ジヴェルニー訪問
- 5月 制作
- 6月 展示 “Future Mythology Diaries”
- 7月 展示 ドイツ, ミュンヘン訪問
- 8月 フランス オーヴェル・シュル・オワーズドイツ, ドイツ ミュンヘン訪問
- 9月 オープンスタジオ ‘Les Traversées du Marais’、グループ展 “Invisible Infinity” 参加
- 10月 アートフェア FIAC 見学、イタリア（ヴェネチア、ローマ訪問）ヴェネチアビエンナーレ見学
- 11月 アメリカ ニューヨーク訪問
- 12月 スペイン バルセロナ、ジローナ訪問
- 1月 イギリス ロンドン訪問
- 2月 ドイツ ベルリン訪問
- 3月 南仏エクサンプロヴァンス、マルセイユ訪問 オープンスタジオ中止

【 制作・発表 】

《 *Future Mythology Diaries* 》

Joshi University - Art & Design, Japan x Cité internationale des arts,

Galerie - Cité Internationale des Arts, Paris FRANCE

2019年6月20日 - 7月13日

女子美術大学とCité internationale des artsのコラボレーション20周年を記念し、女子美パリ賞歴代受賞者による展覧会。欧州在住者8名は作品、そして日本等在住者は映像にて出展した。

<女子美パリ賞受賞 出展作家>

保科晶子、新津亜土華、井上織衣、角谷沙奈美、高木彩、野口香子、井上麻由美、松山聖子

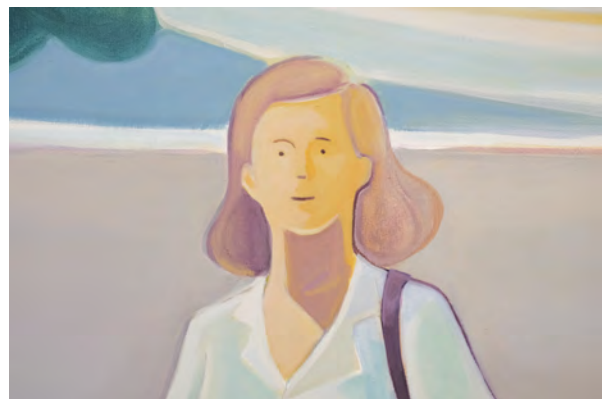
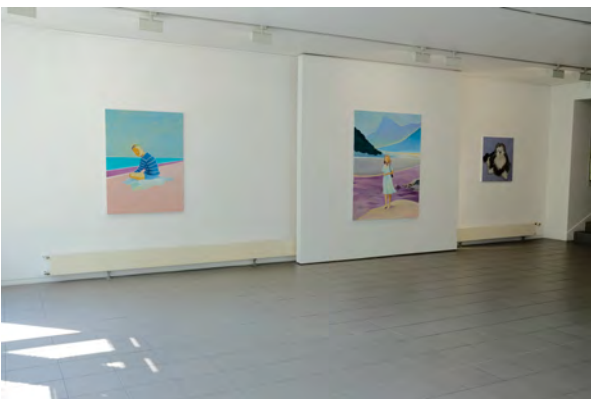
<女子美パリ賞受賞 作品映像上映>

土方朋子、野村千夏、橋本美智子、いしばしめぐみ、田口一枝、松沢真紀、藤倉明子、
上岡ひとみ、音羽晴佳、中村菜都子

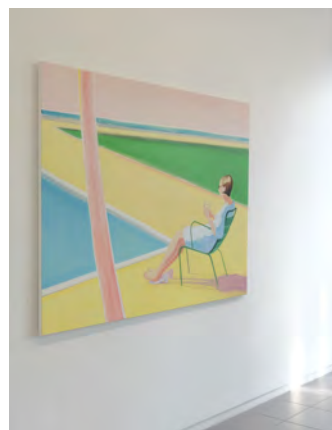
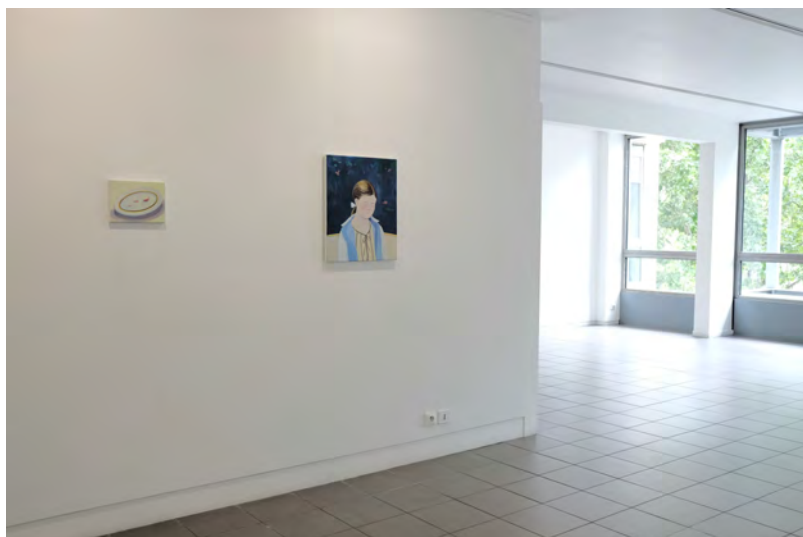
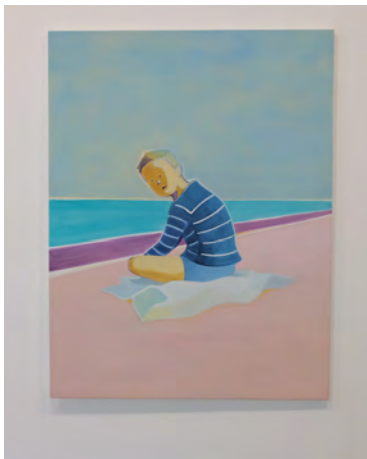
コンセプト

パリの蚤の市で手に入れた古い写真や手紙を手掛かりにした絵画を制作。油彩作品6点を発表した。

見ず知らずの人々の思い出たちを手掛かりに過去の人々の暮らしに思いを巡らせ、そこに私自身のパリでの日々を重ね合わせることを試みた。



展示風景



《 Invisible Infinity 》 Exposition collective de 8 artistes japonaises

GALERIE YOSHII, Paris France

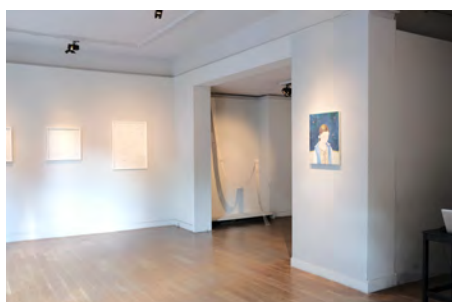
2019年9月5日 - 9月21日

< 出展作家 >

保科晶子、新津亜土華、井上織衣、角谷沙奈美、高木彩、野口香子、井上麻由美、松山聖子

cite internationale des arts にて行われた展覧会《Future Mythology Diaries》

の出展作品を中心に再構成された展覧会。絵画作品2点を出品した。



《 *Les Traversées du Marais* 》

Cité Internationale des Arts, Paris FRANCE

2019年9月6日 - 9月7日

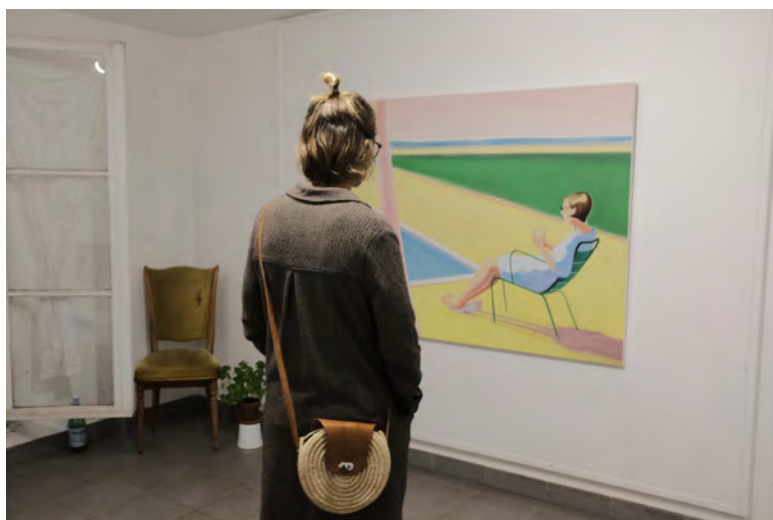
Les Traversées du Marais とは cite international des arts をはじめとするマレ地区にある美術館や文化施設がメンバーとなっている marais culture +によって年に一度開催されるアートイベントである。マレ地区にある約30カ所が会場となる。Cite internationale des arts では滞在アーティストによるオープンスタジオが開催された。

コンセプト

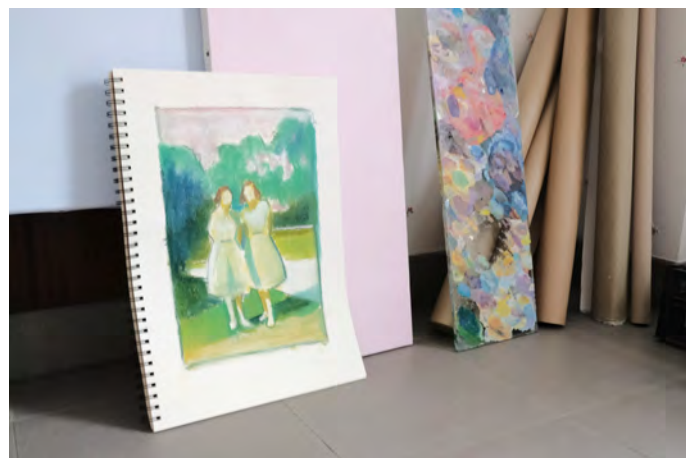
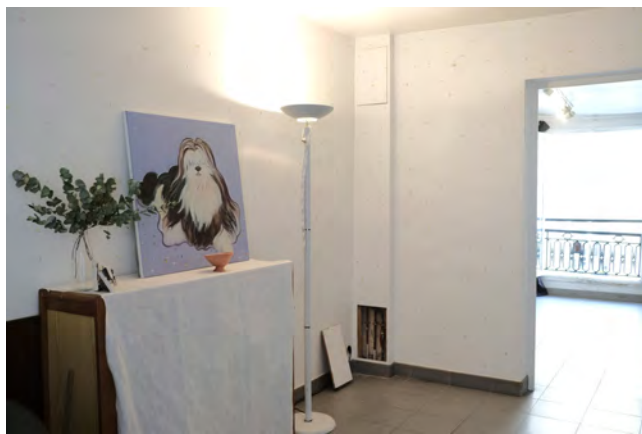
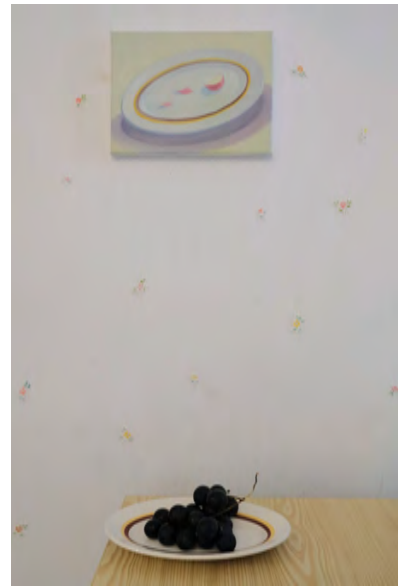
このオープンスタジオでは、絵画とインスタレーションを活用し、アートと日常の境界を曖昧にすることを試みた。

ある日の朝八時、電話がなった。受付のフレッドから、「メンテナンススタッフがこれから10分後に部屋に行く。」という内容だった。受話器を置くと部屋の呼び鈴が鳴った。私はフランス語と状況がよくわからずパジャマのまま彼らが作業する様子を見ていた。彼らは壁にあった隠し戸を開け、中に隠れていた配管を黙々と修理をして帰って行った。そして私はその配管の裏に古い壁紙が残っているのに気がついた。アトリエのあるこの建造物は、築100年は余裕で超えている。きっとそれぞれの時代でそれぞれの日常があっただろう。この花柄の壁紙はその誰かの日常をリアルに伝えていた。

リフォームされてまっさらな状態のこの壁を、私はまたこの花柄で埋め尽くし、昔そこにあった誰かの生活を再現することにした。そしてその空間の中にパリの蚤の市で手に入れた古い写真や手紙を手掛かりにした絵画作品や日用品を構成し、空間が持つ記憶を表現した。



展示風景



【Cité international des arts】

Cité international des arts (以下 Cité) は1965年に開設され、世界中から集まった300人のアーティストが生活し制作活動を行なっている。ジャンルも様々で画家やアーティスト、映画監督にミュージシャン、ダンサー、研究者などが滞在している。

滞在期間は様々だが、女子美のような1年の長期は稀で3ヶ月の滞在者が多かったように思う。常にアーティストの出入りがあり、出逢いと別れが同時に起こる。滞在中の過ごし方も様々だ。リサーチと少しの実験をメインにする人、アトリエにこもって制作する人。そして家族連れの人も多く、まるで一つの町のような感じだ。

Citéは大きく分けて三つの建物で構成されている。セーヌ川沿いにある本館(レセプション、コンサートホール、ギャラリー、ランドリーなど)、別館アネックス、女子美のアトリエが入る建物。この建物はCitéが出来た前からあり、元々住居として利用されていたものだろう。それぞれの居住スペースには、アトリエ キッチン シャワールームがある。快適な空間で、制作に集中するための十分なスペースと生活空間がある。

パリの中心、セーヌ川沿いに位置し、主要な文化施設へ徒歩でアクセスすることが可能で、その立地条件の良さは約2ヶ月続いたメトロなどの公共交通機関のストライキの際に特に実感することとなった。滞在中、多くの時間を美術館で過ごす事が出来る贅沢な環境だった。

アーティストの任意で行われるオープンスタジオはアーティスト同士の一番のコミュニケーションの場となっている。毎週どこかのアトリエが開かれており、滞在中の締めとして行く人が多いようだった。不思議なのは、アートという共通項があると、私のような英語力でもコミュニケーションが取れてしまうことだ。お互いの作品についての何気ない会話から、どのような援助を受けてここにいるのか、アーティスト以外の仕事をもっているかなど、アーティストのみで生きていく厳しさを垣間見る場面もあった。

オープンスタジオはCitéのホームページ上で告知され外部にも開かれているが、滞在アーティスト間のコミュニケーション場という印象が強い。私が参加したオープンスタジオはLes Traversées du Maraisというマレ地区全体で開催されたアートイベントの一つだったこともあり、Citéのアーティストだけではなく外部からの来客が多く、様々な視点から作品の感想を得ることができた。

オープンスタジオに加えて月に一度Cité主催のランチ会も開かれる。その他にSNS上に非公式のグループがあり、参加者は自由に書き込みが出来る。ランチ会やオープンスタジオと同様に、コミュニケーションの場となっていた。内容は様々で展示の告知からコラボレーションする人を募るもの、そして本館の廊下にお化けが出る、工事の騒音、お湯が出ないなどのクレームまで幅広い。(お湯は結局3週間近く出なかった。) どんな議題にも様々な意見が出て興味深かった。

本館にあるホールでは月1のペースでコンサートも行われている。美術だけでなく音楽やパフォーマンスなど、日常的に様々なジャンルのアートに触れたことは大変刺激になった。このジャンルを超えたコミュニティーを持つ環境はシテデザールの魅力のひとつであった。特にデザインを学んだ友人との出会いは世界や物事を別の角度から捉える新鮮な視点を私に与えてくれた。



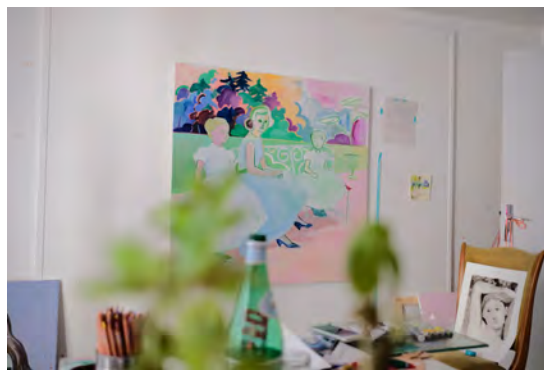
本館



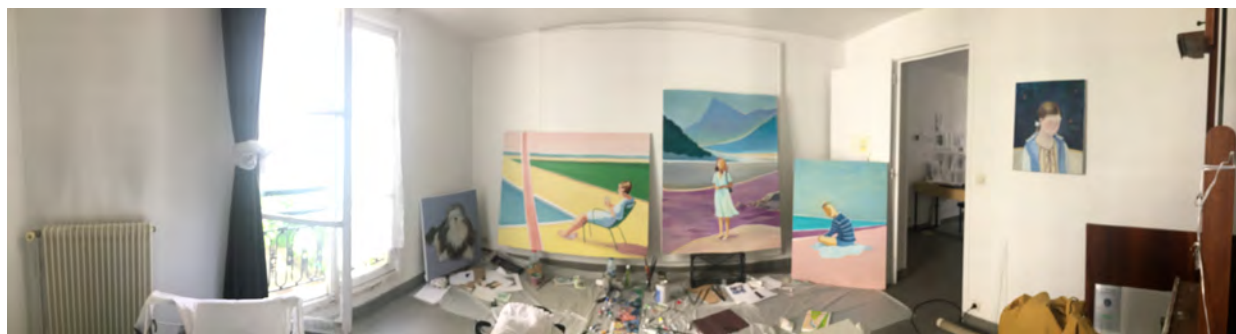
各スタジオでのコミュニケーション



コンサートホール



女子美アトリエ



女子美アトリエ

【フランス語】

日本ではフランス語の基礎を独学で身につけ、渡仏前には個人レッスンを受けていた。決して十分ではなかったが意味はわからなくても、読めるというだけでもストレスは軽減されたように思う。

Cité ではフランス語教室が開かれており、週に二日、10時半から12時まで行われる。参加者のレベルは上級者から私のような初心者まで様々だ。その為、週末はどうだった？などの簡単な質問からスタートし、ディスカッション形式で行われる。英語の使用は禁止されており、日を追うごとに受講者は減って行く。芸術や政治について上級者が熱く意見を交わしている中でじっと座って3ヶ月、私は「？」マークばかりを量産していたのだが、ついに脱落し、ポンピドゥ・センター内にある図書館が主催する初心者向けのフランス語教室に通うことにした。週に一回無料で開講されており、様々なバックグラウンドを持つ人たちが参加している。継続して参加する人は稀で毎回授業前には自己紹介を行った。そんな一期一会に近いコミュニティーではあったが、様々な理由でパリに来た人々の存在を知る貴重な経験となった。そして数ヶ月後そこで知り合ったカタルーニャ出身の女性の故郷を友人として尋ねることになった。彼女の存在は私のパリ滞在をとっても豊かなものにしてくれた。

この授業でとても印象的だったことがある。授業中、文法についてわからないところがあり、なぜそのようになるのかと先生に質問すると、先生は「その方が美しいからだ。」と答えた。その答えは私が求めていたものとは違ったが、妙にじっくりくるものがあった。慣れない環境での生活において、制作活動と並行してフランス語を学ぶ事に心が折れそうになっていたが、その答えを聞いてもう少し続けてみようと思えた。

渡仏前、フランス人はフランス語に誇りを持ち、フランス語しか話さないと耳にしていたが、若い人や店員は英語を話す。しかし会話の始めは大抵フランス語だった。フランス語がわかる前提で話すのだ。よく道も聞かれたし、メトロ内でも隣の席の人に話しかけられた。最初はそれをストレスに感じていたが、逆にフランス語を話せれば、見た目や文化などのアイデンティティーが違ってもフランスのコミュニティーに入れるのかもしれないと思うようになった。結局私のフランス語は美術論を議論するどころか、市場での会話も危ういレベル止まりだったが、近隣諸国に出かけた際、フランス語の挨拶がとっさに出てしまい苦笑いをよくした。挨拶をとっても大切にしているフランス文化に習い、Bonjour だけはしっかり体に染み込んだ。

【研究活動】

1年間の滞在では制作の他に、アトリエの外へ積極的に出かけた。パリ市内を始め南仏、ドイツ、イタリア、アメリカ、スペイン、イギリス、を美術館や史跡を中心に旅して回った。パリだけでなく他の都市を巡り、自分の中に比較対象が増えたことで日本と西洋の比較だけでは見えてこなかった発見があった。

各都市を隅々まで歩き気づいたのは、地形や気候などの環境が人々の性格や習慣の違いを作り、やがて言葉が生まれそれぞれ固有の文化を育てていくということだ。傾斜の急な坂道で汗を掻きながら、摩天楼でビル風に凍えながら、そしてサント・ヴィクトワール山を眺めながら「訪れて見ないと気が付けないことがなんと多いことか。」と私はそれぞれの街角で痛感した。旅を通してその土地や文化に理解が深まっていく過程はとても有意義なものだった。降り注ぐ日差しや風の匂いを感じることは、その街で活動した芸術家への理解を深める助けとなった。そして旅を終えパリに戻るたびに、新たなパリの魅力と抱える問題に気づくことが出来るのも面白い経験だった。

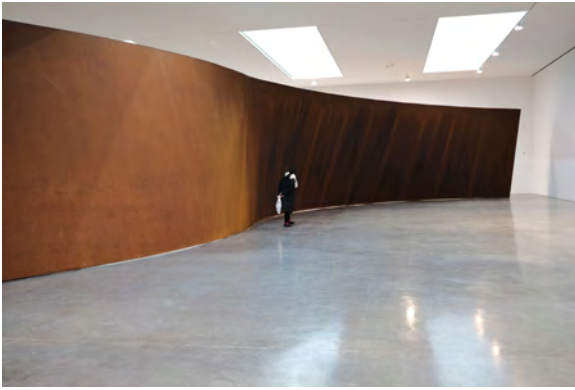
異国での暮らしの中で、常に意識せざるを得なかったのは自分自身の存在についてだった。友人との他愛のない会話の中で、中国語で挨拶された時。そしてアジア美術と大きくカテゴリーされた博物館の空間の中で。あらゆる場所で外国人であること、日本人であるということを強く意識することになった。その一方で、ニューヨークでは初めて訪れたにも関わらず、その街並みや文化に、日本に帰ってきたみたいだと懐かしさを感じてしまった。それはアメリカ文化が自分を形成する核の部分に大きな影響をもたらしているのだと気が付ききっかけとなった。そもそも西洋文化の中で感じてきた自分の中の日本人、日本らしさとは一体何だったのか。そして、自分が育った土地、環境、歴史について見つめ直す必要性を強く感じたのだった。



ヴェネチアビエンナーレ リトアニア館「Sun & Sea (Marina)」



イタリア・ローマ古代遺跡 フォロ・ロマーノ



ニューヨーク、ガゴシアンギャラリー Richard Serra



ニューヨークの街並み



Michel Serre, Vue de la Cours pendant la peste de 1720
Marseilles, Musée des Beaux-Art



ジヴェルニー モネの庭



エクス・アン・プロヴァンス、サント・ヴィクトワール山



エクス・アン・プロヴァンス、ポール・セザンヌ アトリエ

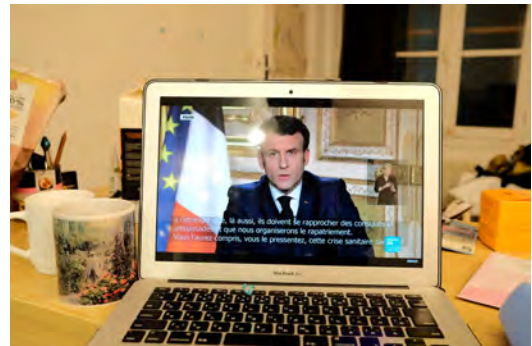
【結び】

私のパリ生活はノートルダム大聖堂の火災から始まった。毎週末は盛んに黄色いベスト運動が行われ、夏には冷房機器のない部屋で記録的猛暑を経験した。師走になるとメトロをはじめとする交通機関などがストライキを始め、収束するのに結果2ヶ月かかった。やっとメトロが動き出し、日常が戻ってきたと思われた矢先、対岸の火事であった新型コロナウイルスの猛威が足音もなく急に間近に迫ってきた。あつと言う間に外出制限が発令され、それを受けて予定を前倒ししての帰国に至った。その後自宅での2週間の隔離生活を送った。

私の滞在目的の一つに、アートと日常の境界線を探るといったものがあった。非日常である異国での生活から日常とは何かを考え、生活・制作・展示を一括りとし、一つの作品として提示できるかを試みるつもりでいた。しかし、ノートルダム大聖堂の火災を目の当たりにして、日常というものがとてつもなく儂いものだとことを思い知った。そして新型コロナウイルスでそれは決定的なものとなった。



パリ、黄色いベスト運動の様子



マクロン大統領による演説

この一年で経験した出来事は、アートと社会の繋がりについて考えるきっかけとなった。自分たちの権利のためストライキをするオペラ座のダンサーや音楽家や、コロナ感染防止のため人数制限が行われ、ガラガラの客席の前で踊るダンサーの姿はとても印象的だった。美術館などの文化施設が休館していく中で、私自身も予定していたオープンスタジオを開催しても良いのだろうか複雑な思いで準備をしていた。こんな時だからこそ、アートが必要なのだと意気込んだものの、なかなか筆を握る気にはなれなかった。(結局、最後に予定していたオープンスタジオも中止になってしまった。)

コロナの影がフランスにも広がり始めた3月、旅先のマルセイユの美術館でペストを題材に描かれた絵画を目にして私は恐怖を覚えた。300年前に描かれたこの絵が、まるでこの先の未来を予想しているかのようだったからだ。それは時を越え未来を予言し、世界を映す絵画の力を実感する出来事であった。

絵画と対峙した時、数百年前に描かれた作品が強烈な新鮮さを持って迫ってくることもある。また、絵画の一

場面を彷彿とさせるような場面に出会うこともあった。フランスに緊急事態宣言が出された次の日、カフェや商業施設が休業している中で、公園やセーヌ川の辺りにはいつも以上に人々が溢れ、ピクニックや散歩を楽しんでいた。それはこの状況下では不適切なのかもしれない。しかしその光景は幸福感を感じさせるものだった。そんな光景を眺めながら私はマネの絵を思い出していた。

帰国して一ヶ月経った現在も、コロナの収束の目処は立っていない。今後の見通しが見えない混沌とした状況の中で自分の無力さに心が折れる日々を送りながら、今この時代に絵を描き続ける意味を自問している。この一年の滞在で古典から現代に至るまで、数多くの芸術作品に触れ、西洋における美術史の流れを実感する事が出来た。そして今その大きな流れの先端に自分もいることを意識し、この目で見て感じたことを丁寧に描き続けていこうと思う。その先に答えがあると信じて。

最後に、貴重な経験を与えてくださった大村智先生、女子美術大学の先生をはじめスタッフの皆様、この滞在を支えて下さった全ての方々に心より御礼申し上げます。



セーヌ川で語らうパリの人々